

ユダの手紙「信仰のための戦い」

1A 戦いの勧め 1-4

1B 愛された人々へのあいさつ 1-2

2B 恵みを放縦に変える者 3-4

2A 不敬虔な例 5-16

1B イエス・キリストの否定 5-11

1C 放縦にふける者 5-7

2C 罵る者 8-11

2B 災いの宣言 12-16

1C 愛餐のしみ 12-13

2C エノクの預言 14-16

3A 愛された者たちへの言葉 17-25

1B 自分の守りと他者の救い 17-23

1C 使徒たちの語ったことば 17-19

2C 自分自身への働きかけ 20-21

3C 疑う者たちへの憐れみ 22-23

2B つまずきから守る方 24-25

本文

ユダの手紙を開いてください。ついに、黙示録の前の、最後から手前の書物まで来ました。次回は、黙示録に入りますが、黙示録に入らなくとも、使徒たちはずっと、イエス・キリストが現れることを教えていました。ユダも同じですね。そして終わりの時に、教会に偽預言者が入って来ることも、何人もの使徒たちが教えていました。ユダは、そのことに取り組みます。説教題は、「信仰のための戦い」です。私たちが、この終わりの時に、ものすごい惑わしがある時に、それでも戦う必要があることを、この手紙が教えてくれています。

1A 戦いの勧め 1-4

1B 愛された人々へのあいさつ 1-2

¹ イエス・キリストのしもべ、ヤコブの兄弟ユダから、父なる神にあって愛され、イエス・キリストによって守られている、召された方々へ。

ユダの手紙のユダは、ここで自己紹介をしているように、「ヤコブの兄弟ユダ」です。聖書には、同じユダの名前が多く出てきます。けれども、ここでは、主イエスの半兄弟であるヤコブの兄弟ユダです。ナザレの人たちが、会堂でイエスが教えておられるのを見て、こう言いました。「マルコ6:3

この人は大工ではないか。マリアの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。その妹たちも、ここで私たちと一緒にいるではないか。」イエスご自身は、まだマリアが結婚する前に、聖霊によってお生まれになっています。処女降誕です。けれども、その後に結婚して、ヨセフとマリアの間に生まれたのが、ヤコブであり、ヨセ、ユダ、そしてシモンです。その他に妹たちも生まれています。

イエスの弟たちは、兄が復活するまでは、まだ信じていませんでした。仮庵の祭りが近づいていた時に、彼らがイエスに言いました。「ヨハ 7:3-5 ここを去ってユダヤに行きなさい。そうすれば、弟子たちもあなたがしている働きを見ることができます。自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。」興味深いですね、とても人間的なアドバイスをイエス様にしています。信じていない人から、私もアドバイスを受けたことがあります。こうやれば、もっと効果的に伝道できるんじゃないですか？なんて。

このようにしてイエスに提案していたのですが、彼らが変わったのは、この方の復活です。キリストの復活について、パウロがコリント第一 15 章で証言していますが、「その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。(7 節)」と言っています。肉の家族にメシアがおられることを認めるのは、とても大変だったと思いますが、しかし、ヤコブだけでなく、他の弟たちもこの方のよみがえりを見て、信じたのだと思います。よみがえりこそが、この方が単なる人ではなく、神の御子ご自身であることが公にされたからです。「ロマ 1:4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」

そして今は、ユダは、ヤコブもそうでしたが、「イエス・キリストのしもべ」と自分を呼んでいます。自分がイエスの弟であったとって、権威付けしていません。しもべ、なのです。しもべというよりも、奴隷と訳した方がいいギリシア語です。デューロスと言います。すべて主人の所有物となっているという意味合いがあります。自分が、全くすべて主イエスに明け渡しているということです。

そして、受け手が、「父なる神にあって愛され、イエス・キリストによって守られている、召された方々へ」であります。まず、父なる神に愛されています。この愛を知っていることが、私たちの特徴でなければいけません。それだけでなく、イエス・キリストによって守られています。いろいろな試練や試みがあっても、イエス・キリストに守られているのです。主が、父なる神に祈られました。「ヨハ 17:15 わたしがお願いすることは、あなたが彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。」

最後に、召されているということです。選ばれて、召されているからこそ、私たちは守られ、神の国に確かに入れることが保障されています。自分で選んでいたら、自分の意志で再び、信仰から離れてしまうことでしょう。けれども、神が召しておられるので、その愛の中で、イエス・キリストにあ

って守って、最後まで守ってくださるのです。

²あわれみと平安と愛が、あなたがたにますます豊かに与えられますように。

手紙の挨拶ですが、他の使徒たちと少し違いますね。パウロは、恵みと平安と言いました。しかし、ここでは「あわれみ」が始めてきます。私たちには、救われる時に憐れみが必要なだけでなく、その後も日々、憐れみが必要です。哀歌では、エレミヤが廃墟となったエルサレムを嘆き悲しみながら、次のことに気づきました。「哀 3:21-24 私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。【主】の恵みを。」実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は偉大です。【主】こそ、私への割り当てです」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」

そして、平安があるようにといい、次に、愛が、ますます豊かに与えられるように、と言っています。ユダがこの手紙で強調しているのは、愛です。ヨハネの手紙もそうでした、真理のうちを歩む者たちに対して、本当に愛していると繰り返してヨハネは話していました。

2B 恵みを放縦に変える者 3-4

³愛する者たち。私たちがともにあずかっている救いについて、私はあなたがたに手紙を書こうと心から願っていましたが、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。

ユダが、「私たちがともにあずかっている救い」について手紙を書こうと思っていました。真理の中にいる者たちには、主イエス・キリストにある神の救いを共有しているのです。自分独りが単独で救われているのではなく、救いの共同体が広がっているのです。

ユダは、初めはこのことについて手紙を書こうと心から願っていました。ところが、「信仰のために戦う」必要が生じたとのことです。私たちは、もちろん、神の救いをともに喜んで、教会が平穏にいつまでもいることを願います。けれども、これまで使徒たちの手紙を見れば分かりますように、信仰の戦いというものがあります。ネヘミヤ記には、エルサレムの城壁の再建で、戦いの武器を持ちながら城壁の建築をしていた場面が出てきます。神の家が建て上げられる時も、戦いをしなければいけない時があるので、その備えが必要です。

その信仰が、「聖徒たちにひとたび伝えられた信仰」とあります。主が使徒たちに語られ、御霊も使徒たちと預言者たちに語っていかれました。その教えを伝えていくのが、他の弟子たちの務めです。パウロはコリントの人たちに、こう言っています。「I コリ 11:2 さて、私はあなたがたをほめたいと思います。あなたがたは、すべての点で私を覚え、私あなたがたに伝えたとおりに、伝え

られた教えを堅く守っているからです。」このようにして、二千年後に生きる私たちにも、この信仰が伝えられてきているのです。

そして、「信仰のために戦う」ように勧めないといけないと言っています。戦うということですが、もちろん血肉の戦いではありません。霊の戦いであります。「奮闘する」とか、「苦闘する」という意味があります。それは自分自身も誘惑に引き込まれることのないように、心を武装することであり、信仰について、偽りに惑わされることなく、決して妥協することがないように堅く保つことです。パウロが、霊の武具を身につけなさいと言った通りです。真理で腰の帯をしめます。正義の胸当てをつけます。履物は、平和の福音の備えです。頭は救いのかぶとです。そして信仰の大盾を持ちます。こうやって、フル装備で防備して、御霊の剣、みことばで攻撃するのです。

⁴ それは、ある者たちが忍び込んできたからです。彼らは不敬虔な者たちで、私たちの神の恵みを放縱に変え、唯一の支配者であり私たちの主であるイエス・キリストを否定しているので、以下のようなさばきにあうと昔から記されています。

ここで「忍び込んできた」という言葉が大事です。偽預言者や偽教師、また偽兄弟は、「私は偽物です」ということは決してありません。ひそかに忍び込みます。敵は、外部からであれば防御しやすいですが、内部に入ってきたものを取り除くのは、非常に大変です。すでに、彼らのことを受け入れてしまい、感情的な密着を持ってしまうからです。キリストのからだのために奮闘しているのに、愛がないと責められるかもしれません。だから、外側に向かって戦うよりも、自分自身の肉との戦いも含めて、奮闘するという感じです。

彼らは、「不敬虔な者たち」です。「神の恵みを放縱に変え」ます。神の恵みとは、私たちが受けるに値しないものを受けることです。罪の中で死んでおり、肉の欲望の中で生きて、ついに神の怒りを受けるにふさわしい者であったのにも関わらず、あわれみ豊かな神が私たちを愛し、キリストによってよみがえらせ、天に着く者としてくださいました。罪と死に定められていた私たちを、神の栄光の真ん中に招き入れてくださるところに、神の恵みがあります。

ところが、これを「放縱」に変えるのです。ロマ 5 章の最後で、パウロは、「5:20 罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。」と言いました。そこで、私たちは、罪を犯せば恵みをいただくことができるのだから、恵みをいただくために罪をもっと犯そうではないか、という愚かな発想を抱きます。そこで、6 章冒頭でパウロは、「6:1-2 恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか。」と言っています。

神の恵みによって、私たちは罪に対して死んだのです。古い人は、キリストと共に十字架につけ

られました。だから、私たちはすでに罪に対して死んでいるのであって、神の恵みによって、罪の支配から解放されています。そこで、罪を犯していてもよいなら、未だ罪の支配にいることになり、これは救われていない、ということになります。

そこで、「唯一の支配者であり私たちの主であるイエス・キリストを否定している」と言っています。まず、自分の歩みが主を否定しています。その方の命じられたことに逆らっていますから。それだけでなく、公然と歯向かいます。これが主の命令ですね、と言っても、いかに、こちらがひどいことを言っているかとそしめるのです。善を悪であるとして、自分が悪なのに善だと主張するのです。この手紙で、彼らは、「ぶつぶつ不満を並べる者(16 節)」と呼ばれます。

2A 不敬虔な例 5-16

1B イエス・キリストの否定 5-11

1C 放縦にふける者 5-7

⁵ あなたがたはすべてのことをよく知っていますが、思い起こしてほしいのです。イエスは民をエジプトの地から救い出しましたが、その後、信じなかった者たちを滅ぼされました。

ユダは、これから次々と、過去に起こった、不敬虔な者たちの例を挙げていきます。過去に起こったとだけども、たった今、教会の中に忍び込んでいて、神は過去にそうしたように、今も裁かれるのだよと、警鐘を鳴らします。

初めに、イスラエルの民が荒野で滅んだことです。ここでユダが取り上げている問題は、「信じなかった者たち」です。神がイスラエルの民を、せつかくエジプトから連れ出したのに、彼らが、カデシュ・バルネアで不信の罪を犯したから、荒野をさまようことになり、そこで死に絶えるままにされました。神の約束があるのに、それを信じないでいる。信じているように見えない歩みをしているならば、イスラエルと同じ道を歩んでしまうのです。

ここで興味深いのが、主語が、「イエス」となっていることです。文法上、4 節の「私たちの主であるイエス・キリスト」につながっているのです、そのような訳し方をしているのでしょう。そして、これは事実、正しいです。主は、ベツレヘムでお生まれになった時だけでなく、永遠の昔から、世の始まりからすでにおられました。そして、父なる神とご自身は一つです。アブラハムの前に、わたしはあると、主はユダヤ人たちに証言されました。アブラハムは、イエスご自身を見たのです。モーセにも、燃える柴の中で現れて、「わたしは、あるというものだ」と宣言されました。

⁶ またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。

次の例は、御使いです。私たちは、御使いあるいは天使は目に見えないので、どうしても視野の中から隠れてしまうがちですが、聖書には明確に、御使いが活発に動いているのを知っています。

その中で、墮落した天使たちを見ます。それが、ここに書いている、「自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたち」の事です。イザヤが、バビロンの王について預言している時に、その王の背後で働いているのが、明けの明星と呼ばれた存在で、サタンです。「いと高き方のようになろう」と言っています(14:14)。そして、黙示録には、竜が三分の一の天の星を地に投げ落とした、とあります(12:4)。サタンが初めに、自分の領分を守らずにいと高き方の座に着こうとしたので、引き落とされ、その手下になった天使どもも、全体の三分の一が引き落とされました。

私たちは、数多く、悪い霊どもが動いているのを聖書の中で見ます。特に、福音書は、イエスご自身が悪霊どもと対峙して、人から追い出されるのを見ます。使徒たちも、主の御名によって行いました。イエスが、レギオンと対決された時に、レギオンは、「ルカ 8:31 底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないようにと懇願した。」とあります。悪霊どもが、閉じ込められる底知れぬ所があり、そして、火と硫黄の池であるゲヘナがあります。そうしたところに、永遠に鎖につながれて、暗闇の中に閉じ込められる定めにあるのです。

ここで見る問題は、反逆です。自分が神によって置かれているところをわきまえずに、うぬぼれて、高ぶる事です。

⁷ その御使いたちと同じように、ソドムやゴモラ、および周辺の町々も、淫行にふけて不自然な肉欲を追い求めたため、永遠の火の刑罰を受けて見せしめにされています。

「その御使いたちと同じように」と言って、それからソドムとゴモラにおける、同性愛の問題を取り上げているのが興味深いです。これらの御使いが、自分の領分を守らなかったという、反抗の問題もありましたが、実は肉欲の問題もあったということです。それが記されているのは、創世記 6章です。「創 6:2 神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、それぞれ自分が選んだ者を妻とした。」とあります。御使いが、人の女と淫行を働くなど、極めて不自然な肉欲です。

それと同じように、ということです。ソドムやゴモラにおいて、ロトが、裁きを宣言するためにやってきた御使い二人を家に迎え入れた時に、その者たちとやりてーと言って、男の集団がやってきました。男による男に対する集団レイプを、公然と行おうとしたのです。それで、主からの天からの火が下り、黒焦げになりました。ここでは、その火が「永遠の火の刑罰」とありますから、単なる物理的な火だけでなく、死後も苦しめる火なのだということが分かります。

ここでの不敬虔の問題は、言うまでもなく「肉欲」です。エゼキエル書にも、ソドムの問題が書か

れています。「エゼ 16:49 だが、あなたの妹ソドムの咎はこのようだった。彼女とその娘たちは高慢で、飽食で、安逸を貪り、乏しい人や貧しい人に援助をしなかった。」安逸を貪ることのできるような豊かさがありました。人は問題がないと、余計なことを考えます。良からぬことをします。そして、自然の男女の関係ではなく、不自然な関係を求め始めたということです。

2C 罵る者 8-11

このようにして、不信、反抗、それから肉欲という問題によって、神が裁かれた例を見ました。これらのことを、教会に忍び込んできた者たちは行っていたということです。さらに、権威を認めない、栄光あるものたちをそしているという問題があります。

⁸それにもかかわらず、この人たちは同じように夢にふけて、肉体を汚し、権威を認めず、栄光ある者たちをののしっています。

これまで見てきた、肉の欲の問題は昔からありました。けれども、上からの権威というものは、昔はもっと尊ばれていました。それが平等とかという言葉によって、上に立てられている人、権威が与えられている人に対する敬意がなくなっています。互いに対する敬意がなくなっています。それで、自分の心に思っている事こそが正しい、絶対であるかのように、平気で、罵っているという問題が起こっています。終わりの時には、反キリストが大言壮語し、天におられる神、また天に住む者たちを冒涇することが、黙示録 13 章に書いてあります。

⁹御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて悪魔と論じて言い争ったとき、ののしってさばきを宣言することはあえてせず、むしろ「主がおまえをとがめてくださるように」と言いました。

これは、非常に興味深いです。モーセが死んで、主が葬られたことについては、申命記に書いてあります。しかし、その遺体について、ミカエルと悪魔が論じて言い争ったという話はないのです。これは、「モーセの遺訓」とか、あるいは「モーセの昇天」とか呼ばれるものがあり、そこに記されているそうです。旧約聖書ではないのですが、ユダヤ人たちの間でよく読まれていた話を、ユダは持ってきています。その書物自体は、靈感を受けていませんが、ユダがここで引用している部分は、聖霊の導きがあるので、実際に起こったと言えます。

大事なのは、当時のユダヤ人の間では、よく知られた話だったのです。先ほど、黙示録 12 章で、竜が天使の三分の一を、道連れにしたことを話しましたが、そのすぐ後で、ミカエルと竜が戦って、竜が劣勢となり、それで地上に落ちる話があります。悪魔は、神と対等であるかのように思ってしまうことがあります。いやいや、悪魔は、主の前ではしもべでしかありません。反抗していても、神の許しなしには、何もできないのです。悪魔が対等なのは、天使長であるミカエルです。

その、力あるミカエルでさえ、悪魔に対して、そのまま罵りませんでした。悪魔とて、今、言いましたように、主の許しなしには活動ができないのです。ですから、そこに主がおられなければ、自分が悪魔をののしってはいけないという自制が働きます。そして、主が咎められるようにと、主ご自身のみこころであれば、という思慮を使ったのです。

¹⁰ しかし、この人たちは自分が知りもしないことを悪く言い、わきまのない動物のように、本能で知るような事柄によって滅びるのです。

本当に恐ろしいことですが、悪魔でさえ、天使長であるミカエルが直接、罵らなかったのに、罵っているのです。「自分が知りもしないことを悪く言い」なんていうことは、世の中で当たり前のように行っています。ところが、教会の中にも忍び込んで、こんなことをやっていることがあります。恐ろしいことです。そして、わきまのない動物のように、本能で動いていると指摘しています。

¹¹ わざわいだ。彼らはカインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、コラのように背いて滅びます。

聖書に出てくる、滅んだ三人を取り上げていますね。カインは憎悪にかられました。彼の子孫は、ノアの時代に洪水で滅びました。そして、バラムですが彼は金に目が眩みました。貪欲です。そしてコラは、高ぶりです。

2B 災いの宣言 12-16

1C 愛餐のしみ 12-13

¹² この人たちは、あなたがたの愛餐のしみです。恐れる心もなく一緒に食事をしますが、自分を養っているだけです。彼らは、風に吹き流される雨無し雲、枯れに枯れて根こそぎにされた、実りなき秋の木、¹³ 自分の恥を泡立たせる海の荒波、真っ暗な闇が永遠に用意されている、さまよえる星です。

「愛餐のしみ」と言っていますが、この者たちが教会の中に忍び込んでいるので、その愛餐のしみになっているということです。そして、一緒に食事をする時に、教会はそれを互いに分け合う、分かち合うためのものなのですが、ただ自分の利益のため、自分を養うためだけにしています。

そして、ここに出てくる、いろいろな表現は、旧約聖書のいろいろな箇所、悪者に対して使われている表現が反映されています。共通している特徴は、一つに、水がないということです。雨無し雲、根こそぎ枯れていて、実りがない木です。水は神のいのちを示していますが、罪を犯している者はその反対に、水がなく、カラカラになっていて、火に焼かれて吹き飛ばされてしまいます。そして、海の荒波とありますが、これも平安がない姿で、悪者を示しています。最後に、真っ暗な闇、

永遠の滅び、地獄のことを言い表しています。

2C エノクの預言 14-16

¹⁴ アダムから七代目のエノクも、彼らについてこう預言しました。「見よ、主は何万もの聖徒を引き連れて来られる。¹⁵ すべての者にさばきを行い、不敬虔に生きる者たちのすべての不敬虔な行いと、不敬虔な罪人たちが主に逆らって語ったすべての暴言について、皆を罪に定めるためである。」

アダムからノアにつながる系図の中に、主とともに歩んだエノクが紹介されています。彼は主とともに歩んでいたため、死を見ることなく、引き上げられました。後に来る洪水のさばきを通らずして、救われたのです。これは大患難時代を通らないで、その前に引き上げられる教会の姿です。そして、エノクが預言をしました。旧約聖書にはその預言は書かれていませんが、外典の中に「エノク書」というのがあり、そこからの引用です。エノク書は、先ほどのモーセの遺訓と同じく神の靈感を受けた本ではありませんが、ユダが聖霊の導きによって、神の真理として引用しました。

「何万もの聖徒を引き連れて来られる」とは、主が地上に再臨される時の預言です。千万の聖徒を引き連れて来られるのですが、これは、すでに携挙によって引き上げられた教会です。主とともに戻ってきます。そして、主が地上に戻ってくるときに、不敬虔な者、神を恐れない者はことごとくにさばかれます。テサロニケ第二1章においても、「1:8 主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。」とあり、神の裁きがあります。

¹⁶ 彼らは、ぶつぶつ不満を並べる者たちで、自らの欲望のままに生きています。その口は大げさなことを語り、利益のために人にへつらいます。

これが、恵みを放縦に変えて、教会に忍び込んでいる者の姿で、これまでのまとめです。第一に、自分の欲望のままに生きています。第二に、大げさなことを語ります。第三に、自分の利益のためにへつらいます。この三つの特徴に当てはまるような人がいれば、要注意です。みなさんも、避けてください。

3A 愛された者たちへの言葉 17-25

1B 自分の守りと他者の救い 17-23

1C 使徒たちの語ったことば 17-19

ここまでは、旧約聖書、またユダヤ人に良く知られている話でした。次は、使徒たちも同じことを語っているとユダは論じます。

¹⁷ 愛する者たち。あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの使徒たちが前もって語ったことばを思い起こしなさい。¹⁸ 彼らはあなたがたにこう言いました。「終わりの時には、嘲る者たちが現れて、

自分の不敬虔な欲望のままにふるまう。」

私たちが、ずっと使徒たちの手紙を見て行って、そうなんです、このような不敬虔な者たちが現れることを、また現れていることを指摘しているものを、読んできていました。例えば、パウロは、テモテへの第一の手紙で、敬虔にかなう教えに同意せず、議論やことばの争いをしている者たちがいることを話しました。ヨハネも第一の手紙で、神を知っているといいながら、罪を犯して、使徒たちの教えから離れている反キリストと呼ばれる者たちを、話していました。

そしてペテロ第二が、まさにユダが警鐘を鳴らしている者たちと同類の者たちのことを話しています。18 節の言葉は、そのまま第二の手紙で書いているような内容です。「3:3-4 まず第一に、心得ておきなさい。終わりの時に、嘲る者たちが現れて嘲り、自分たちの欲望に従いながら、こう言います。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」」

¹⁹ この人たちは、分裂を引き起こす、生まれつきのままの人間で、御霊を持っていません。

教会の中で、これらの者たちは分裂を引き起こします。ロマ 16 章でも、パウロが同じことを指摘しています。「ロマ 16:17-18 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまづきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。そのような者たちは、私たちの主キリストにではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。」

こういった者たちは、どんなに主の名を呼ぼうが、神を知っていると云おうが、「生まれつきのままの人間で、御霊を持っていません」ということです。もし御霊がおられるなら、このようなことをしないはずなのです。したとしても、御霊によって罪示されて、悔い改めるはずです。全く無感覚になっているということは、いろんな知識を持っていても、新生体験を持っていません。

2C 自分自身への働きかけ 20-21

次、20 節は「しかし」から始まります。つまり、これまでの不敬虔な者に対する、神のさばきがありますが、今度は、神のあわれみによって救われることへの確信があるよと、語りかけるのです。これだけの戦い、葛藤があるけれども、しかし、あなたがたはこうしなさいと励まします。

²⁰ しかし、愛する者たち。あなたがたは自分たちの最も聖なる信仰の上に、自分自身を築き上げなさい。聖霊によって祈りなさい。²¹ 神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに導く、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。

午前礼拝で詳しくお話ししましたので、ぜひ聞いてください。信仰のために戦う時に、私たちに必要なのは、意外かもしれませんが、「自分を労う」ことです。ここで、自分自身を築き上げなさい、自分自身を保ちなさいと言っていますね。戦う時には、実は自分自身をしっかりと養っていくことはよいことなのです。自分がしっかりと建て上げられ、守られていることによって、神の武具を身につけ、霊の戦いをすることができるのです。

ここには、パウロがテサロニケの第一の手紙でも、またコリント第一でも語っていた、キリスト者として最も大切な、三つの要素があります。一つは、信仰です。最も聖なる信仰の上に、築き上げなさいと言っています。次に、希望があります。それは、イエス・キリストが現れて、私たちがその憐れみにあずかる、ということです。そして、愛があります。神の愛のうちに自分自身を保ちます。愛、希望、そして信仰です。

最も聖なる信仰というのが、私たち自身が、聖霊が宿られる、神の宮であることを前提にしています。至聖所にまで入り、キリストの血が流されて、罪の清めがなされたというところに築き上げるのです。そして、聖霊がおられるので、聖霊によって祈るのです。

それから、神の愛についてですが、愛がなければ、私たちは到底、これら神の正しい裁きから免れることはできません。神が私たちを愛して、御子をくださり、この方を信じる者が、滅びから免れ永遠のいのちを得るのです。そして、その愛にあって、主が来られる時に私たちはあわれみを受けるのです。栄光ある主にお会いするのですから、私たちは、他の不敬虔な者たちと同じように、たちまち滅んでもおかしくないのです。ところが、主は憐れんでくださるということです。

3C 疑う者たちへの憐れみ 22-23

²² ある人々が疑いを抱くなら、その人たちをあわれみなさい。²³ ほかの人たちは、火の中からつかみ出して救いなさい。また、ほかの人たちは、肉によって汚された下着さえ忌み嫌い、神を恐れつつあわれみなさい。

自分自身をきちんと建て上げ、また守られることによって、初めて、他の人々を憐れむことができます。ここでは、神の裁きを受けるべき、不敬虔な者どもに対する憐れみです。驚くべきことですが、その人が悔い改めることができるように、憐れむ必要があることを教えられています。

「疑いを抱く」というのは、悪い教えをする者たちに影響を受けてしまっている人々です。そして、「ほかの人たち」というのは、どっぷり、その不敬虔さにとどまっている者たちです。彼らから、その汚れや悪から影響を受けることなく憐れむ必要があるので、「火の中からつかみ出して救いなさい」と勧めています。

そして、極めつけは、「肉によって汚された下着さえ忌み嫌い」と言っています。これは、淫行によって汚れた下着のことです。そんなものが、教会の中に置かれていたというんでもないことが、起こっていたのです。そういった者たちが神の怠りない裁きを受けるのですが、彼らが悔い改めて立ち直ることができるように、自分自身がそうした汚れから影響を受けることがないように、注意して憐れみなさいと勧めています。

2B つまずきから守る方 24-25

²⁴ あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができる方、²⁵ 私たちの救い主である唯一の神に、私たちの主イエス・キリストを通して、栄光、威厳、支配、権威が、永遠の昔も今も、世々限りなくありますように。アーメン。

最後の、頌栄の言葉がとても大事です。主が来られる時には、憐れみの確信です。主は、私たちをつまずかないように守ることができます。そして、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立つことができるようにしてください。主の真実があります。他の使徒たちの言葉には、そのように立つことができるように、という祈りもあります。「I テサ 5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。」祈りがあるので、主の御前に立つことができるのかできないのか、分からないというように聞こえます。けれども、続けてパウロはこう言っています。「5:24 あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてください。」主は真実なので、そのようにくださることです。

この二つは矛盾しません。祈りであると共に、神の憐れみで、確信でもあるのです。私たちは主が、守ってくださるからといって、その恵みを放縱にかえたら、それは非常に危険です。まさに、ここに書いてある者たちのようになります。だから、責められるところのない者になるようにという祈りが必要です。けれども、どうなるか分からないという不安定な状態になる必要もないのです。主の真実を信じて、守られることに安心してください。同時に、祈ってください。このどちらもがあって、私たちは、恵みによって成長するのです。